京都・平安京左京内膳町跡

1 所在地　京都市上京区烏丸通上長者町上ル龍前町及び同区室町通中立売下ル花立町

2 調査期間　一九七八年（昭53）二月一日～十二月十六日

3 発掘機関　京都府教育委員会

4 調査担当者　平良泰久・奥村清一郎

5 遺跡の種類　都城跡

6 遺跡の時代　平安時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査地は、平安京左京北辺三坊六町に相当し、諸司厨町の一つである「内膳町」の配置されたところであり、さらにまた中世以降の京都の中心地の一つであった「上京」の町組の一画でもある。

調査の結果、平安時代の建物・井戸・溝・柵等の配置が「四行八門制」に略一致する形で検出された他、以後江戸時代に至るまでの膨大な資料を得た。調査面積約一九〇〇㎡、ゴミ穴を主体とする遺構の総数約四〇〇ヵ所、出土遺物はコンテナ約一三〇〇箱分に及ぶ。

木簡が出土したのは、江戸時代初期の土壙SK四二・SK四五及び江戸時代前期の土壙SK二五二である。前者は室町通に近く隣接してある一辺一・〇m前後の隅丸方形の土壙で、土師器・陶器ともに桶・曲物・折敷・釣瓶・柄杓・箸・下駄・糸車・糸巻・木簡その他の木製品や漆器椀・筆箱等が一括投棄されていた。後者は、前者と離れて烏丸通側にある長径二・五m、深さ一・八mの土壙で、後述する木簡一点とともに唐津系陶器を主体とする多量の陶磁器類が出土した。このSK二五二の位置は、江戸時代の古絵図によれば、公家「醍醐家」の屋敷地の中に含まれる。

8 木簡の釈文・内容

SK四二・SK四五出土の木簡には、慶長九年（一六〇四）・十年の年紀をもつものがあり、伴出遺物にも共通性が著しいことから、両者合わせて慶長期の一括遺物と考えられる。墨書の内容及び木器の種類のいずれも「糸」に関するものが顕著である。中でも(1)の木簡は、慶長九年に制定された糸割符法に従って長崎から京都へ運送された最初の生糸に伴う荷札であり、同法による交易の実態を示す唯一の資料として貴重である。これらの木簡等によって、江戸時代初期、禁裏六丁町の一つであった花立町のこの地が、幕府権力と結んだ糸商松屋三郎右衛門の屋敷であったことを知り得るのである。

SK四二出土木簡

(1)・「㊁□……□□白糸六十斤入　」

・「㊁□……□慶長九年□長崎年寄中 NAGASA□□」 (265)×(43)×9　011

(2)「□〔わカ〕く□

十六匁三分」 98×24×12　061

(2)は組合わせた糸車横木に墨書したもの。

(3)×十□〔三カ〕□× (99)×23×12　061

(2)に同じ。

(4)「喜□□□〔くカ〕」 153×215×14　061

(4)は糸車枠木側面に墨書したもの。

SK四五出土木簡

(5)「　慶長拾年

松や三郎右門」 245×(62)×8　061

(5)は桶底板に墨書したもの。

(6)「□上〻糸」 144×16×6　011

(7)「白□〔糸カ〕□× (91)×20×2　019

(8)「いろはにほへと」 89×15×15　065

SK二五二出土木簡

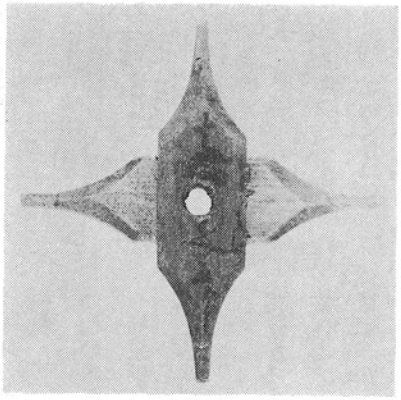
(9)「〻進上× (36)×19×4　039

9　関係文献

平良泰久・伊野近富・塩沢珠代「平安京内膳町跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)　一九七九年

平良泰久・伊野近富他「平安京跡(左京内膳町)昭和五四年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980)』京都府教育委員会)　一九八〇年

(平良泰久)



SK42出土木簡〔糸車〕(2)